

優しく強い子に！



<http://www.minamih.net/>  
21・5・5(水)  
南NEWS no 18

### 材料がいっぱい！！と

5月5日(水)の文化大Gでの自主練習。  
1年生のリク君が1対1の練習で、シザースを使って相手を抜こうとしていました。「シザースで抜こうとしていたね！」と褒めたら「家で練習していたの」との答え。  
リク君が家でシザースの自主練ができたのも、日頃の練習でいろいろな材料を提供してくださったからです。幼児・1年生の練習やゲームを観ていると、たくさんの材料が子ども達に提供され、子ども達がチャレンジしているのです。とても楽しく、嬉しい光景です。  
Wタッチの連続で得点を挙げる子が何人もいます。シザースやいすの形をトライする子もいました。有り難うございます。



5月5日(水) 文化大G 壮年のみなさんが練習後に石拾い有り難うございます。

しっかり読んでほしいです！！

朝日新聞 スポーツ 5月5日(水)

だから三苦は止まらない

…「前半から(DFが)食いついてきていた。ターンしてスピードを上げれば勝てると思った。狙い通り」

「後出しじゃんけん」

向き合う相手を軽々と抜き去るドリブルをこう言い表すのは、母校・筑波大サッカー部の小井土正亮監督だ。

「自分で相手を抜けるとわかっているからこそ、仕掛けることができる」。ぎりぎりまで相手の動きを見極め、その逆をつくからこそ高い成功率が、三苦のドリブルの特徴だ。

今や三苦の代名詞と言えるテクニックは、一朝一夕で身につけたものではない。小井土監督によれば、1年生の時は「高校生のいい選手レベル」。だが、3年生で「別格」になったという。

**大学入学後は全体練習の後に必ず、チームメイトと1対1での練習で技術を磨いていた。相手を抜き去るドリブル、ボールを失わないためのドリブル……。少しずつ技の引き出しを増やしていった。**

小井土監督は

「能力におごることなく、長所を伸ばした結果が今の活躍に繋がっている」と語る。

5月5日(水)の朝、この記事を読んで中学・高校とチームメイトだった阿部正光君を思い出しました。

中学時代はCFの矢上にパスを出すだけの目立たない選手でしたが、高校に

入ってからは三苦選手のように全体練習の後に先輩と1対1を毎日練習して、相手を抜き去るドリブルの力を身につけたのです。

全国大会優勝の実績もある名門・浦和西校戦でキックオフからドリブルを始め、3ラインを一気にDFラインまで抜き去り得点を挙げたのです。このシーンを観ていた浦和西校の中西監督が大笑いをしていたのを記憶しています。

このプレーが評価されたのか、この年度の埼玉県ベストイレブンに選ばれたのです。

日立本社(柏レイソルの前身)が天皇杯を取ったときはレギュラーではありませんでしたがスーパーサブでした。私が決勝をテレビで観ていると後半に交代出場してきました。解説者が“ヘディングの狙いですね”と言っていたのです。日立本社は優勝し、天皇杯優勝のメダルを後日見せてもらいました。

矢上は阿部君が1対1の自主練をしている時、Wタッチの練習と左足でクロスを上げる練習をしていました。自分で見つけた課題です。その成果は夏の高校総体埼玉県予選準々決勝の浦和南戦の延長前半に結実したのです。1対1で延長の前半、左サイドをWタッチの連続で突破からの左足でプルバック。その2アシストで3-1の勝利、ベスト4進出に貢献することができたのです。

浦和南も、サッカーアニメ『赤き血のイレブン』のモデルになった永井良和選手を擁して、何度も全国を制覇した名門です。そのチームを撃破することに貢献できたことは私のサッカー人生の中で、良き思い出の一つです。

### 三苦 選手の言葉

頭が下がっていると周りが見えないし、その分、相手からも『こいつ選択肢がない』と思われて飛び込まれやすくなる。前を向いていれば相手も近づきづらいオーラを感じると思うし、姿勢を正すというのは大切なんです。



パスをする時点で相手や味方がどう動いて、自分がどこで受ければチャンスになって、シュートが打てるイメージできていた。しっかり決められたし、イメージ通りのゴールでした。

プレッシャーとまではいかないが『点が入らないなあ』と考えてしまっていた。力んでいたというか、『自分、自分』になっていたのもあった。周りの選手を使うことへの大切さ、力を抜くことの大切さを実感させられた。

海外で活躍することと、日本代表としてワールドカップを戦うのは小さいころからの夢。サイドだけでなく中央でもプレーできて、ドリブル、パス、シュート、なんでもできる選手をめざす。メンタリティ、フィジカル、いろんな要素を加味して誰から見ても、すごいと思われる選手になりたい。今はまだほど遠いので、日々、頑張るしかない。



今のCクラスを観ていると久方ぶりに南から東京都選抜に入る子が出るのではと清水コーチと話しています。今できている材料の提供がこれからはっきりとできればの話です。指導者の責任でもあります。やり甲斐ですね。

“ゲームは最良の師”と言われますが、提供される材料が貧乏なゲームは、戦後すぐの失敗した経験主義の教育・プラグマチズムと同じで“這い回る経験主義”になってしまいます。学びの少ない、実りのない、感動・喜びのないゲームになってしまうのです。

